

《英学史散策》

ラフカディオ・ハーンは平家琵琶を聞いていない

川瀬 健一

2003年4月から平家琵琶を習い始めて、今年の4月で15年が経つ。全200句（曲ではなく句と呼ぶ）の内、特別の句11句を除く189句はすべて語れるようになり、先生から、全200句を修得し免許皆伝となるためにも、人前で語る体験を増やすことが重要なので、今年から自分の語りをする平家琵琶会を開催しなさいと強く勧められた。

そこで3月11日を皮切りに、隔月の第2日曜日に自宅で平家琵琶会をすることにしたのだが、このことを日本英学史学会の人々にお知らせしようと思いついたとき、ラフカディオ・ハーンの『怪談』にある「耳なし芳一」の問題が気にかかった。それはハーンがこの話を書くに際して、実際に平家琵琶を聞いたのか聞かなかったのかという問題が先行研究では今一つ明らかではないと感じていたからだ。

ではハーンは実際にこの物語をどう描いたのか。そしてこの物語には前提になる伝承があったのかなかったのか、この問題を調べてみたところ、ハーンがこの話を書く際には江戸時代の怪談話の本、1782年に出された『臥遊奇談』（一夕散人著）の「琵琶秘曲泣幽霊（びわのひきよくゆうれいをなかしむ）」を参照しており、妻セツとの共同作業で、短い原作を大きくふくらましたことは、セツの『思い出の記』で明らかにされているので、この原本をネットで参照し、ハーンの記事と比較してみた。

この結果、ハーンは原典では簡明に記されていた箇所を何か所もさらに描写を具体的で迫真の効果が出る形に書き改めており、そしてそれは「耳なし芳一」の話では、芳一が平家の亡霊達の前で平家語る場面で特に顕著であったことがわかり、ハーンの創作になる文章表現から、ハーンとその妻セツが平家琵琶を聞いてはいないことがほぼ確実となった。

元の説話では壇ノ浦の戦いのところを語ってほしいと芳一は依頼されて、それを語ると、「初めの所では左右で感賞した声がこそこそと聞こえたが、一門入水の篇に至ると男女感涙して居並ぶ人々の間から感涙の声がおこった」としか書かれていない。

ところがハーンの記事では、

『Then Hōichi lifted up his voice, and chanted the chant of the fight on the bitter sea, -wonderfully making his biwa to sound like the straining of oars and the rushing of ships, the whirr and the hissing of arrows, the shouting and trampling of men, the crashing of steel upon helmets, the plunging of slain

in the flood. And to left and right of him, in the pauses of his playing, he could hear voices murmuring praise: "How marvelous an artist!"—"Never in our own province was playing heard like this!"—"Not in all the empire is there another singer like Hōichi!" Then fresh courage came to him, and he played and sang yet better than before; and a hush of wonder deepened about him. But when at last he came to tell the fate of the fair and helpless,—the piteous perishing of the women and children,—and the death-leap of Nii-no-Ama, with the imperial infant in her arms,—then all the listeners uttered together one long, long shuddering cry of anguish; and thereafter they wept and wailed so loudly and so wildly that the blind man was frightened by the violence and grief that he had made. For much time the sobbing and the wailing continued. But gradually the sounds of lamentation died away; and again, in the great stillness』と表現した。

つまり芳一は声を張り上げて語り、琵琶の音で合戦の場面のさまざまな情景を表現して語ったところ、左右から賞賛の声が聞こえ、さらに語り続けると周囲は不思議なほど静まり返り、二位の尼が高貴な幼子を抱いて身投げする場面を語りだすと、聴衆の全てが一斉に長く、長く打ち震え悲痛な泣き声を上げ、あたりかまわず騒々しく涙して嘆き悲しみ、最後には大きな沈黙となったと表現したのだ。

臨場感溢れる見事な改作だが、この表現がハーンと妻セツとが平家琵琶を実際には聞いたことがなく、場面の表現をより臨場感溢れるものにするために、芳一の琵琶語りの場面を想像で創作したことを示している。

ハーンと妻セツは、出版されている平家物語で壇ノ浦合戦を描いた章段は、1「鶏合（とりあわせ）・壇ノ浦合戦：熊野別当湛増が紅白の鶏を戦わせて源平どちらの味方をするかを決めた場面と熊野勢が源氏に味方して合戦が始まった様子」と、2「遠矢：先陣が互いの弓矢の強さを競った場面」、さらに3「先帝身投：平氏の敗勢明らかとなる中で安德帝や平家女官や武将の多くが入水自殺」、そして4「能登殿最期：平家の武将たちの最期の場面」の4つの章段からなっていることを確認して、芳一が語ったのはそのうちの1の後半と2・3の場面と判断。さらに芳一の語りは「鬼神をも動かす」と原作に書かれ、「平氏一門の亡霊が感涙に咽んだ」と原作にあるので、ここを臨場感あふれる表現とするために、芳一の琵琶が琵琶の音で臨場感たっぷりに演じたから人々を感涙させたと考えて、「琵琶は、必死に櫂を漕いで突進する舟、ヒューあるいはシュー

と鳴る弓矢、踏ふみつけにされた人の悲鳴、兜のガチャガチャという金属音、渦巻く波間での殺戮の様子を、驚くべきほど巧みに奏でていた」という表現にしたわけだ。

この琵琶の音によって情景の表現がなされたとしたところが、ハーンとセツとが平家琵琶を実際には聞いていないことの証拠である。

そして物語の他の個所、芳一が夜に寺を抜け出したのを追いかけた寺の下人達が見失い、阿弥陀寺の墓場の方で「琵琶の音が聞こえた」ので安徳帝の墓の前で琵琶を弾ずる芳一を見つけた場面でも、原作は「琵琶の音が聞こえた」としか表現していないのに、ハーンの記事では、『they were startled by the sound of a biwa, furiously played, in the cemetery of the Amidaji.』として、「琵琶を弾く荒々しい音が聞こえた」ところでも琵琶を荒々しく激しく弾じたとしているところも、彼らが平家琵琶を実際には聞いていないことの証拠である。

なぜならば、この「耳なし芳一」の説話は、その原型としてはすでに1677年に出来た『宿直草』に現れているので、芳一が奏でた琵琶は平家琵琶であることは確実だ。薩摩琵琶は江戸時代後期に薩摩地方のみに広がった琵琶楽であるし、筑前琵琶は明治に入ってきた新しい琵琶楽である。そして鎌倉時代からの伝統を持つ平家琵琶では、薩摩や筑前のように情景の臨場感を出すために撥（ばち）で糸を擦ったり琵琶面を叩いたりして効果音を使うことはなく、琵琶を激しく弾じて大きな音を出すことはない。琵琶は語りの音域が2オクターブほども上下するために、音域が変化するまえに、その語りの音域を示すための短い手を静かに演奏するだけで、あくまで主役は語り手の語りだ。さらに平家琵琶の名手の語りは、聞く者の眼前に亡霊が出現して語るかのような臨場感あふれるものと昔から伝えられてはいるが、その臨場感は、物語の登場人物の一人称語りにこそ由来しているのである。

平家物語原文を読んでみれば、この物語は場面の進行役を務める年代記的なナレーションのような物語部分と、登場人物が切々とその心情を語る一人称語りとで成り立っていることがわかり、実際に平家琵琶を聞いてみれば、琵琶はほとんど活躍することなく、さまざまに音域や節を変えての一人称語りとその主役であることがわかる。

ハーンと妻セツとが、芳一の語りを先に見たように、琵琶による効果音で支えられたものと表現したということは、二人が琵琶語りを聞いたことがあったとしても、それは薩摩琵琶か筑前琵琶であって平家琵琶ではなく、平家琵琶もまた薩摩や筑前のように、物語を詠うようにして語り、撥による効果音や大きな音で臨場

感を出すものだと考えて先のような表現にしたものと思われる。

そして芳一が語る場面は、ハーンの記事では「lifted up his voice」（声を張り上げ）、「song」（詠う）と表現されていることは、ハーンとセツとが思い描いた平家琵琶の語りや、薩摩琵琶や筑前琵琶のような「琵琶歌」を声を張り上げて詠うものであったことを示している。実際の平家琵琶では声を張り上げることはなく、音程の上下はあってもほぼ一定の大きさの声で、淡々と語るものなのだ。

ハーンが日本で暮らした日々は、日清戦争・日露戦争の前後の時期である。この時期の日本では、勇壮な軍歌を詠いあげる薩摩琵琶が爆発的な注目を浴びて各所で演奏会が催され、一方では悲しい恋歌などを詠いあげる筑前琵琶がもてはやされ、どちらもプロの奏者だけではなく、多くのアマチュアの奏者がいて、全国どこでもこの琵琶楽を聞くことの出来る時期であった。

しかし平家琵琶は、唯一その歴史と現状を記した書物である『平家音楽史』（館山漸之進著1910年刊）によれば、廃藩置県によって諸大名に俸給で抱えられてきた盲目の琵琶法師たちはその庇護を失い、平家琵琶を語ることを辞めて、副業の鍼灸按摩や琴・三味線の教授で生計を立てていたもので、平家を語れる奏者は東京に元琵琶法師の数人と晴眼者が数人、そして青森の弘前に晴眼者数人がいるのみで、しかも演奏会があっても私的な会合か琵琶関係者の法要でしかなく、一般者が参会できるものではないので、ほとんど聞くことができないものになっていた。

ハーンが暮らしたところは、1890年に来日して以後は、島根県の松江と熊本県の熊本。そして1896年に帝国大学講師となって上京し、1904年の死去まで東京で暮らした。したがってハーンと妻セツとが接することの出来る琵琶楽は、鹿児島に始まって明治に、特に1894-95年の日清戦争以後に全国に広がった薩摩琵琶と、明治に福岡で生まれて全国に広がった筑前琵琶の可能性が高い。

ハーンの記事の「耳なし芳一」の英文の表現と、その元となった江戸時代の怪談話の表現とを比べて、実際の平家琵琶の表現と照らし合わせてみれば、ハーンと共同執筆者であるその妻セツとが、平家琵琶を聞いて臨場感あふれる表現にと改作したのではなく、当時流行していた薩摩琵琶や筑前琵琶の表現と同じものと考えて改作したことが良くわかるのである。